

待降節第一主日

2014.11.30

マルコ 13・33-37

今日、わたしたちは待降節第一主日を迎えました。教会の典礼の一年の暦は、今日の待降節第一主日をもって始まります。わたしたちが通常それに従って生活している暦には、それが教会の暦でなければ、どこにも今日の日曜日が待降節第一主日であることは記されていません。たとえ、教会の暦を使っても、日々の暮らしの中でそれに気をとめることがなければ、今日の日曜日も普段どおりの日曜日として過ぎてゆくことでしょう。多くのわたしたちにとって、今日の日曜日を待降節第一主日だと意識できたのは、こうして、教会に来ることが出来て、このミサに参加することが出来たからであるかもしれません。しかし、こう言うのは言いすぎかもしれません。どんなに教会に来たくても来られない事情の中で、もう待降節なのに、クリスマスもま近かなのにと、悲しい思いでいらっしゃる方々のことを、わたしたちは知っているからです。

今日の福音には、「目を覚ましていなさい」という呼びかけが繰り返し響いています。「目を覚ましていなさい」という呼びかけにはどのような意味が込められているのでしょうか。「目を覚ましていなさい」とは何のために、何に対して「目を覚ましていなさい」ということなのでしょう。難しく考える前に、今日の日曜日が待降節第一主日であることを、どこまで意識していたかを反省してみたいと思います。待降節ということばを聞く時、どのようなことを心の中に感じているかを反省してみたいと思います。

待降節は言うまでもなく、クリスマスの準備の季節です。けれども、今日のミサの中で待降節の歌を歌う時、「ああ、もうクリスマスだな」という思いしか浮かばないとするなら、「目を覚ましていなさい」という今日の福音の呼びかけは、わたしたちの頭の上を素通りしただけということになりかねません。

クリスマスとは、わたしたちにとってどのようなことであるのかということ、あらためて心のうちに噛み締めたいと思います。そのクリスマスに向けての準備の待降節をもって、わたしたちの教会の新たな一年が始まるということの意味を、じっくりと考え直してみたいと思います。一年また一年と過ぎてゆく時の流れの中であって、日曜日ごとにささげられているミサが、何を記念し、何を祝い、何を願ってささげられているのかということが、わたしたちの心に届いていないとするなら、カトリック信者としてのわたしたちの信仰は、新たな目覚めを必要としているのです。

わたしたちが信じているイエスは「わたしは世の終わりまで、いつもあなた方とともにいる」と言い残されたお方です。わたしたちが自分の信仰に喜びと安心感を覚えることが出来るのは、「わたしはいつどのような時にも、あなた方とともにいる」と言われた、わたしたちの主イエス・キリストを信じる事が出来たからです。けれども、普段の生活の中でわたしたちは、どこまでそのように言うてくださったイエスを意識しているのでしょうか。「わたしはいつもあなた方とともにいる」と言うてくださったイエスを見失ってしまうのは、確かに、わたしたちの日常が忙しすぎるからです。けれども、ことの核心は、そのような外的な生活環境だけにあるのではないかもしれません。そのような生活の中で、わたしたちの心が知らず知らずのうちに、雑ばくになり、散漫になって、心の底まで染入るような感動を持ってなくなってしまっていることを反省する必要があります。わたしたちの心がそのような状態に陥るとき、わたしたちのカトリック信者としての信仰もわたしたちのうちで眠り込んでしまいます。何故なら、「わたしは世の終わりまで、いつもあなた方とともにいる。たとえ、この世でどのようなことが起ころうとも、いつもあなたがたとともにいる」と言われたイエスの保証の言葉は、わたしたちの心の深いところで初めて、感動をもって受け入れることができるおことばだからです。それ以外のところでは、どこを向いても、わたしたちの生活の中には、「わたしはいつもあなた方とともにいる」と言われたお方を見出すことは出来ないからです。

そのようなわたしたちは、新たなクリスマスが必要としているのです。クリスマスの夜、ベツレヘムの馬屋で人知れずお生まれになったイエスを、ことばも忘れて見守り続けたヨセフとマリア、それに羊飼いたちを包んだ深い感動を今のわたしたちは必要としているのです。

教会は年毎に、新たにそのようなクリスマスを思い起こすように、クリスマスの記念の祭りを祝います。それは、「わたしは世の終わりまでいつもあなた方とともにいる」と言われたお方に向って、眠り込んでしまいがちなわたしたちのカトリック信者としての信仰を目覚めさせるためです。日常の生活の中で、わたしたちの信仰が眠り込んでしまうとき、わたしたちは、わたしたちが信じたはずのイエスを見失ってしまいます。そのようなわたしたちのもとに、イエスは年毎のクリスマスの祝いをもって、新たに誕生してくださろうとしているのです。ご自分が約束された、「世の終わりまであなた方とともにいる」ということをわたしたちに気付かせようとして、今年も、わたしたちの中に真実生まれ出ようとしておられるのです。

待降節は、そのようなイエスのわたしたちへの愛に対する、わたしたちの愛の目覚めの時です。教会は、眠りこんでしまいがちなわたしたちの信仰の目覚

めの時として、イエスへのわたしたちの愛の目覚めの時として、待降節をもって一年の歩みを開始するのです。

「目を覚ましていなさい」と言う今日の福音の呼びかけが、目先のことだけに覆われがちな、わたしたちの日常を揺さぶるように祈りたいと思います。

「目を覚ましていなさい」というイエスの呼びかけが、厚く覆われた日常の殻を破って、わたしたちの心の深みを揺さぶることを祈りたいと思います。今日の待降節第一主日にささげるこのミサが、それにふさわしく、わたしたちのカトリック信者としての心の目覚めをもたらすもとなりますように、ともに祈りたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高